

## マタイ24章9-14節 「苦しみの時の福音宣教」

### 1A 全世界への宣教

- 1B アブラハム
- 2B ダビデ
- 3B ダニエル
- 4B イエスご自身
- 5B 使徒たち
- 6B 御使い

### 2A 苦しみ

- 1B イエスの預言
  - 1C 憎しみ
  - 2C つまずき
  - 3C 惑わし
  - 4C 冷える愛
- 2B 出エジプト

### 3A 耐え忍び

- 1B 御霊による愛
- 2B 初めの確信
- 3B 信仰の堅さ
- 4B ダビデの勇士
  - 1C 手放さない剣
  - 2C 退歩しない勇気

### 4A 世の終わり

- 1B 御国の到来
- 2B 報いと慰め

## 本文

マタイによる福音書 24 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びが、マタイ 23 章まで来ましたが、24 章を二週に渡ってお話します。一節ずつ、来週の日曜日に取り組んでみたいと思います。今朝は、24 章 9-14 節に注目します。「9 そのとき、人々はあなたがたを苦しみにあわせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。10 そのとき多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合います。11 また、偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わします。12 不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷えます。13 しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。14 御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。」

私たちは昨日、北朝鮮におけるキリスト教の事情を聞きました。北朝鮮は世界一、キリスト者が迫害されているところとして、あるキリスト教の団体によって 14 年間も連続して挙げられています。<sup>1</sup> 知っていただきたいのは、それが、イエス様が既に弟子たちに語っておられたことだったということです。キリストのゆえに、人々から憎まれる。悪がはびこる。けれども、福音は全世界に宣べ伝えられ、それから終わりが来るということです。

イエス様は、ユダヤ人の指導者に対して、「おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる。(マタイ 23:38)」と言われました。そして弟子たちに対しても、神殿の「どの石も崩されずに、他の石の上に残ることは決してありません。(24:2)」と言われました。その神殿破壊から、弟子たちは旧約の預言を思い出しながら、それは世の終わりを指しているのだと思いました。それで、世の終わりにはどうなるのですか？ということを探っています。その中でイエス様が答えられたのが、今読んだところです。

### 1A 全世界への宣教

私たちは、いつも、自分の信じている神が、**宣教の神**であることを思い出さないといけません。つまり、主はご自身を伝え、そして伝えられた者たちがまた、他の人たちに伝えていくことを願っておられる神だということです。しばしば、伝道と宣教の違いを聞かれますが、伝道は福音を伝えることですが、宣教は自分の置かれているところから出て行き、異なる人々のところに伝えていくことです。

けれども、キリスト教会は宣教の神を信じながら、なかなか宣教の思いを持つことができません。私たちは、日本語で礼拝を守っているのに、日本人のことだけを考えるのが当たり前になっています。けれども、天に今、イエス様が戻って来られて、引き上げられたら驚くことでしょう。あらゆる国語、あらゆる国民、あらゆる部族の人たちが、一つになって、私たちの主イエス・キリストをあがめているのですから。

### 1B アブラハム

福音宣教の始まりは、どこにあるでしょうか？古くは旧約時代、族長時代にまでさかのぼります。主が、アブラハムを召された時のことを思い出してください。ユダヤ人はイエス様に対して、「私たちの父はアブラハムです」と言いました。けれども、彼らだけの父なのでしょうか？主がアブラハムを呼び出された時に、「あなたを大いなる国民とし」と言われましたが、その大いなる国民によって、12章3節に、「地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」とされています。初めから、神がご自分の民を造られる時に、そこに全ての部族が祝福されるという約束を含めていたのです。

---

<sup>1</sup> <https://www.opendoorsusa.org/christian-persecution/world-watch-list/north-korea/>

## 2B ダビデ

そこでイスラエルの歴史には、そのイスラエルの民が自分たちの共同体を持ちながらも、そこに他の民族、異邦人が触れていく話を読んでいきます。典型的なのは、ヨシュアたちがエリコを攻略する時に、イスラエルの神を認めてそのスパイを匿ったラハブです。また、モアブ人ルツがボアズと結婚し、その曾孫がダビデでありました。

そしてダビデが王となり、イスラエル王国が確立しました。彼らは、イスラエル人だけで生きていたかというところではありません。あのバテ・シェバと姦淫の罪を犯してしまった、その夫はウリヤですが、何人だったのでしょうか？ヒッタイト(ヘテ)人でした。彼は、ダビデの三十人の勇士の中の一人でした(2サム 23:39)。そして、ダビデの息子アブサロムがクーデターを起こして、ダビデがエルサレムを出て行かざるを得なくなった時、ガテ人がついてきて、そのリーダーのイタイの言葉は、ダビデへの忠誠を示しています(2サム 15:21)。そしてソロモンの時代は、シェバの女王もいました。神が、異邦人をもイスラエルを通してご自身を示しておられたのです。

## 3B ダニエル

そして、ユダの民がバビロンによって捕え移されます。そこで、捕え移されたダニエルによって、バビロンの王に対して主の証しを立てました。

## 4B イエスご自身

そしてイエス様ご自身はどうでしょうか？イエス様はご自身ユダヤ人であり、そして「イスラエルの羊たち以外のところには、遣わされていません。」とカナン人の女に言われました。しかし、彼女が信仰をもってさらに近づくと、「あなたの信仰は立派です。あなたが願うとおりに。」と言われ、娘から悪霊が追い出され、癒されました。そして大体的な異邦人への宣教は、使徒たちに託されて、アブラハムへの神からの約束、「すべての部族に対する祝福」を、次のように命令されたのです。「ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。(マタイ 28:19)」

北朝鮮の人たちは、隣人とも言えますね。歴史的に、朝鮮半島と日本は長い付き合いをしています。そして日本の統治時代には大勢の朝鮮人が日本に移住しました。今も、その末裔である在日朝鮮人の方々がいます。イエス様は、ユダヤ人にいつもサマリヤ人のことを話したのを思い出してください。ユダヤ人もサマリヤ人も、互いに近いところに住んでいたのに交流しませんでした。けれども、イエス様は敢えてその目に見えない掟を破られて、サマリヤの町に行き、そしてその女に話しかけて、サマリヤ宣教の基を敷かれました。後に、伝道ピリポが宣教に行き、そして大勢のサマリヤ人がイエス様を主として受け入れていくようになります。

## 5B 使徒たち

そしてイエス様が甦られ、昇天し、聖霊がエルサレムにいるユダヤ人たちに下りました。そしてユダヤ教の中でイエスがメシアであると受け入れ、信じられていきました。教会の誕生です。けれど

も、それでもすべての国民を弟子としないという命令に従うには、多くの時間を必要としました。使徒たち自身が、その壁を超えるのに苦労したからです。ペテロが、コルネリオの家に訪れるのに、三度の幻が必要でした。そして、主がパウロを捕えてくださり、彼がバルナバと聖霊によって遣わされ、異邦人伝道が本格的に開始されました。そのパウロでさえ、ユダヤ人の多い小アジアから出て行くのを恐れていたのでしょうか、彼が小アジアに留まっているのを御霊によって禁じられて、それで初めてのヨーロッパ宣教に出かけたのです。

## 6B 御使い

このようにして、主による宣教の思いは、ずっと続きます。なんと終わりの日、患難時代にまで続きます。すでに大患難において、多くの聖徒が殉教している中で、それでも主は何と、その宣教の灯を御使いに命じられます。「黙示 14:6-7 また私は、もう一人の御使いが中天を飛ぶのを見た。彼は地に住む人々、すなわち、あらゆる国民、部族、言語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。彼は大声で言った。「神を恐れよ。神に栄光を帰せよ。神のさばきの時が来たからだ。天と地と海と水の源を創造した方を礼拝せよ。」主の思いが、どれだけ「あらゆる国民、部族、言語、民族に宣べ伝える」というところにあるか、ということをおぼわされます。

## 2A 苦しみ

以上、神の宣教の思いを旧約から新約の終わりの日まで眺めました。そこで、今、読んだイエス様の預言に入りたいと思いますが、このイエス様のあらゆる国民への宣教という過程の中で、必ず経験すること、イエス様を自分の救い主と信じ、受け入れ、信じた時点で、必ず遭遇することを教えてください。一つは「苦しみ」、次に「つまずき」、三つ目は「惑わし」、そして四つ目は「冷える愛」です。

## 1B イエスの預言

### 1C 憎しみ

9 節でイエス様は、「**そのとき、人々はあなたがたを苦しみにあわせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。**」と言われました。これは、使徒の働きを始め、教会史全体を眺めて、起こって来たことです。そして今は、初代教会が始まった時以上に、最も迫害が激しいと言われている時代に入っています。北朝鮮は共産主義圏ですが、イスラム圏における迫害は、とてつもないものだと言われます。日本語には、世界宣教を伝える情報源が本当に限られています。毎日のように、世界各地で教会堂が焼き討ちにされたとか、無残に殺されたとか、そういったニュースが届きます。先週だけでも、例えばエジプトのコプト教会の教会堂に、それは合法に建てられているのに、ムスリムの暴徒が放火したということ。また、ナイジェリアのキリスト者たちが、無残にも大量虐殺されて、銃で打たれた若い姉妹を抱えながら「助けてくれ！」と叫んでいる牧師の動画がフェイスブックで流れてきました。

しかし、ここで「自分たちはこのこととは、無縁だ」と決して思わないでください。私は、日本の国

家権力による弾圧のことを話していません。私たちがいた宣教地のことは、みなさんご存じですね。そこは信教の自由が制限されているところ、教会に対する迫害が強いところとして知られています。けれども我々夫婦は、どちらも「そこにいたほうが、信仰生活が自由だった。楽だった。」ということです。日本においては、「まっとうに信仰を持つとうとすると、とてつもない葛藤の中に入っていき、実質的な信仰を持つことが極めて困難。」という、霊的な圧力を感じます。そして、私はトルコとギリシアに行って、当時の教会があった遺跡を見に行きました。そこは、大きく発展した、豊かな町々が多く、その信仰生活の厳しさは、ある意味、私たち東京に住む者たちのほうが通じるところがあると思ったのです。ですから、迫害を受けるということは、遠い国の話ではなく、まさに皆さんが信仰を持った時点で入って来た、その現場にいるのだということを知ってください。

そして、なぜ国の全ての人々が憎むのか？ということですが、それはイエス様を信じて、イエス様に従っていく人々を通して、イエス様がその人々に証しされているからです。私たちが憎んでいるのではなく、本質的にはイエス様を憎んでいるからです。「ヨハネ 15:18-19 世があなたがたを憎むなら、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを知っておきなさい。もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。」ここで言っている「憎んでいる」というのは、感情的な憎しみではありません。自分自身を明け渡し、神に、そしてキリストに従っていくことを拒む強い心、プライドのことです。今の時代であれば、「あなたがイエスを信じるのは構わないが、私のことには構わないでくれ。」という拒絶です。なんで、こうも拒絶されるのかと言えば、自分が拒絶されているのではなく、その本人がイエス様を受け入れたくないと思っているからです。もちろん、私たちは自分たちの欠けによって、きちんとイエス様を証しできていないという問題があります。そのことを横においても、やはり、クリスチャンとして生きるということは、相手にイエス様を信じて受け入れられますか？という問いかけを、声に出していません。

### 2C つまずき

次 10 節です、「**そのとき多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合います。**」信仰生活を送っていると、いろいろな試しがやって来ます。それで、信仰から離れていく場合が、非常に心が痛みますが、現実にはたくさん起こります。あるいは、信じようと持っていたのに、その手前で完全に頑なにしてしまうということです。そのために、「**裏切り**」が起こります。これまで信頼していた仲なのに、その忠誠を裏切ってしまうのです。これは、今、互いに近づこうとしない、近づいているようで実は心は遠くにある。自己保身のために、築いてきた信頼関係をいとも簡単に捨ててしまう、ということです。そのような裏切りが多ければ、当然、憎しみも出てきます。感情的な憎しみ以上に、本当に憎んでいる時は、関わりを持たないという方法を使います。いわゆる「しかと」ですね。

### 3C 惑わし

そして「惑わし」です、11 節です。「**また、偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わします。**」偽預



言者は、神の名によって、偽りを宣言する人々のことです。聖書に書かれていることを超えて、自分たちの感じていること、思っていることを優先して、それこそが正しく、良いことなのだと教える人々は、教会の中にも増えていくということです。世の中においては、当たり前に行われている価値観かもしれませんが、神の御言葉では罪とされているものがあります。けれども、教会の中で世で言われていることは正しいと、しかも神の名で、キリストの名でそれを行うのであれば、それは偽りの教えと言えよでしょう。

#### 4C 冷える愛

そして 12 節、「**不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えます。**」です。私たちの周りにあまりにも不法を目にします。そして教会外だけでなく、教会内においても不法が行われていることを見聞きます。その度に、私たちの心が試されるのは「愛」です。キリストにあつて、聖霊による愛を持ちます。そして主にあつて燃えます。しかし、そのような不法、躓かせるようなことが起こると、その愛が冷えていくという試しを受けます。それでも、イエス様を求めて、イエス様の愛で満たしていただくという過程が必要なのですが、その愛が冷えて行ってしまうという問題がいつも起こり、終わりの日にはますます、それが激しくなるのです。

#### 2B 出エジプト

しかし見てください、13 節を飛ばして 14 節ですが、「**御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。**」とあるのです。なんと、これらの困難があつても、それらの困難の只中で、神は御国の福音を全世界に宣べ伝える働きを、聖徒たちを通して行われるということです。主は確実に、ご自分の聖霊によってそれを行ってください。先ほど話した、数多くの迫害を受けている国々は、むしろ霊的に前進しているところが多いです。反対者が多ければ、それだけ福音が進まないのではなく、反対者が多い中で、むしろ福音が進んでいくということが起こります。

使徒の働きを思い出してください、エルサレムからサマリアへ、そして地の果てに広がった福音は、迫害と共に広がりました。旧約時代もそうです、イスラエルがエジプトから脱出し、その解放を味わったのは、ファラオが心を頑なにしたからです。そこには数々の困難がありましたが、その困難の中で、主が大いなる奇蹟を行われ、イスラエルを救い出されました。これが、神の宣教方法と言つてもよいかもしれません。

#### 3A 耐え忍び

神が聖霊によってそのことを行ってくださいます。私たちがしなければいけないことは、ただ一つあります。「しっかりと立つ」あるいた「耐え忍ぶ」です。13 節を見てください、「**しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。**」最後まで耐え忍ぶ人たちがいるからこそ、全世界に福音が宣べ伝えられ、それから終わりが来るのです。英語で perseverance という言葉があります。これは「堅忍」と訳されますが、「堅く立ち、耐え忍ぶ」という意味です。一種の頑固さでもあります、どんなに打た

れても、それで立ち上がってしまう、明日のジョーみたいな存在です。気持ち悪いですね、もう死んでも同然になったような、ボコボコに打たれた顔をしているのに、またも立ち上がるのは？けれども、とても単純です。自分自身が、主の愛に満たされていることを、頑固なまでに、どんなことがあっても、こいつ堅物だと言われても、それでも主の救いを大いに喜び、イエス様の愛に満たされることです。

### 1B 御霊による愛

パウロが、困難な中で牧会していたテモテに、次のように励ましました。「2テモ 1:13-14 あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛のうちに、私から聞いた健全なことばを手本にしてください。自分に委ねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって守りなさい。」パウロから聞いた主の教えを、どうやって手本にしているでしょうか？「あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛」ですね。そして、どうやってその信仰を守っているでしょうか？「私たちのうちに宿る聖霊によって守りなさい」ですね。イエス様を頑なに信じるのです、そしてそこから流れる愛を受けることです。そして、自分の力ではなく、聖霊によってその信仰を守るということです。

### 2B 初めの確信

そして、私たちが耐え忍ぶのは、「初めに聞いた福音を、そのまま最後まで確信し続ける」ということであります。「ヘブル 3:14 私たちはキリストにあずかる者となっているのです。もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、です。」こう言う箇所を読むと、「ああ救いは条件付きなのだ、失われることもあるのだ」という議論が多くなります。いいえ、これはそういった話しではなく、すごい励ましなのです。「もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば」なのです。その最初の確信とは何ですか？「イエスが私たちの罪のために来られた、キリスト、救い主であられ、三日目に甦られた。」という確信です。神がキリストによって私たちに愛し、罪の供え物になってくださった、という確信です。この方こそが神の御子であられ、世に戻って来られて、御国を立ててくださるという確信です。すべて神の恵みによって救われた、という確信です。それを保ちさえすれば、ということでもあります。ですから、何らかの行いによって救われるのだということを教えているのではなく、むしろ、神の恵みによって救われているのだという確信を最後まで保ちなさいと励ましているのです。ですから、耐え忍ぶというのは、何かど根性ものではなく、「頑なまでに、救いを喜び楽しむ」ということです。

### 3B 信仰の堅さ

ですから、コロサイにいる信徒たちにこうパウロは勧めました。「2:6-7 このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストにあって歩みなさい。キリストのうちに根ざし、建てられ、教えられたとおり信仰を堅くし、あふれるばかりに感謝しなさい。」教えられたとおり信仰を堅くすると、どうなりますか？「あふれるばかりに感謝」するようになります。そう、このようにキリストバカになるのです！イエス様を信じていて、その信仰を堅くすれば、あふれるばかりに感謝するようになります。また、そのように感謝に満ち溢れなさいと命令されているのです。

## 4B ダビデの勇士

### 1C 手放さない剣

この堅忍、しっかりと立ち、耐え忍ぶの、目に見える手本は、ダビデの勇士たちに見つけることができます。ダビデに三勇士がいて、エルアザルという人は、なんと戦った後に手が剣から離れませんでした。「2サム 23:9-10 彼の次は、アホアハ人ドドの子エルアザル。ダビデにつく三勇士の一人であった。彼らがペリシテ人をそしったとき、ペリシテ人は戦うためにそこに集まった。イスラエル人は退いたが、彼は立ち上がり、自分の手が疲れて、手が剣にくっつくまでにペリシテ人を討った。【主】はその日、大勝利をもたらされた。兵たちが彼のところに引き返して来たのは、ただ、はぎ取るためであった。」私たちが、こうした信仰の戦い、堅忍を行っている、もう剣が自分の手から離れなくなります。そして、自分を通して主の大勝利が起こり、他の人々がその祝福にあずかるのです。

### 2C 退歩しない勇気

もう一人の勇士は、畑の真ん中で踏みとどまって戦いました。「23:11-12 彼の次はアラル人アゲの子シャンマ。ペリシテ人が隊をなして集まったとき、そこにはレンズ豆が豊かに実った一つの畑があった。兵はペリシテ人の前から逃げたが、彼はその畑の真ん中に踏みとどまってこれを守り、ペリシテ人を討った。【主】は大勝利をもたらされた。」踏みとどまるということ、後退しないということ、いいのです前進しなくて、でも引き下がるのではなく、ひたすら踏みとどまるのです。そうすれば、主が大勝利を収めてくださいます！

## 4A 世の終わり

### 1B 御国の到来

こうやって、御国の福音は前進します。そして終わりが来ます。私たちは、イエス様が祈れと命じられた、「御国が来ますように」という言葉を、このような中で祈り求めるのです。

### 2B 報いと慰め

そして報いと慰めから、目を離さないようにしましょう。苦しみの中には、二倍の慰めがあります。苦しみを受けたエルサレムの都に対して、主が慰められましたが、それは私たちにも当てはまることでしょう。「イザ 40:1-2 「慰めよ、慰めよ、わたしの民を。——あなたがたの神は仰せられる——エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その苦役は終わり、その咎は償われている、と。そのすべての罪に代えて、二倍のものを【主】の手から受けている、と。」」そして、どこにおいても、堅忍した聖徒には、大いなる報いが約束されています。ダニエルはバビロンとペルシアにずっといましたが、その終わりは、彼が復活して相続地に立つという約束に終わっていますし、イエス様が五タラント、二タラント任された僕に対して、「良くやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。(マタイ 25:21)」と言われます。